

How the King Created a Popular Monarchy: The Reality and Role of King Bhumibol's Provincial Visits

By Chie Sakurada

Abstract: His Majesty King Bhumibol of Thailand, is a monarch generally loved by his people. Previous research has tended to revolve around his political authority. However, how he came to acquire the backing of the general populace has by and large been neglected. This research details and stresses that, in order to gain popularity as a monarch among his people, his visits to the nation's rural areas were indispensable. By utilizing available public records, this paper also analyzes the means by which he acquired this desired popular backing. In his provincial trips around the country he insisted on visiting common people, and he allowed the use of plain language instead of royal language when people talked to him. Also, by a skillful use of the media as a means of publicity and by encouraging development projects, he highlighted his image as a monarch close to the people and thereby garnered their support.

Keywords: Thailand, Sarit, Bhumibol, King, Monarchy, Provincial Visits

「身近な国王」へのパフォーマンス —タイ国王プーミポンによる地方行幸の実態とその役割—

櫻田 智恵

【要旨】タイ王国現国王プーミポンは、国民からの支持が高い国王であると言われている。しかし先行研究においては、国王の政治的権威に焦点が当たることが多く、国民の支持獲得に向けた国王の取り組みが如何なるものであったかについては明らかにされてこなかった。そこで本稿は地方行幸に着目し、まず、プーミポン国王が自身の独自性として強調する「身近な国王」という国王像の確立には地方行幸が不可欠であったことを指摘した。次に、地方行幸における国王の如何なる行動が国民の支持を集める要因となったのかについて公務記録を使用して分析を行った。地方行幸では特に人民訪問を重視して、国民と親しく接するように努め、またマス・メディアでの宣伝効果等もあって、「身近な国王」という国王像が確立した。さらには、地方に開発事業を導入するなど実質的指導者として振る舞ったことが、国民からの支持獲得へと繋がったと考えられる。

【キーワード】タイ、サリット、プーミポン、国王、王制、行幸、公務記録

はじめに

本稿では、タイ国王プーミポン・アドゥンヤデート（即位 1946 年一）が、「国民に身近な国王」という国王像を確立し国民の支持を獲得するために、どのように行動してきたのかについて、地方行幸に焦点を当てて明らかにする。

タイにおいて国王は「国民統合の象徴」であり（村田 2007, 148）、絶大な政治権力を持つ（McCargo 2005, 499-501）。そのため、タイの教育や政治に対して王制がどのような影響を与えてきたのかという点については、多くの研究がなされてきた。特に、1992 年に発生した「五月の流血事件」¹が国王自身の介入によって終結し、国王の政治的役割について注目が集まると、王制の研究は飛躍的に増加した。これらの研究には、大きく 4 つの潮流がある。まず 1 つ目は、国王自身に焦点をあて、国王や王制について分析したものである（cf. Kershaw 2001; Kobkua 2002, 2003; Handley 2006）。2 つ目が、首相や政府、枢密院などの国王をサポートする人物や機関の発言に着目し、国王の政治的位置づけを明らかにしようとするものである（cf. Connors 2003; McCargo 2005）。3 つ目は、メディア（Hamilton 2002; 野津 2005）や教育（Bowie 1997; 村田 2007）、NIO²（Mulder 1997）などに焦点をあて、プーミポン国王の影響力がどのように広まり、定着してきたのかを分析するものである。そして 4 つ目は、国王その人の発言や行動について分析したものである（กิตติวิทยากุล 1989; กลิ่นฟุ้ง 2008）。これら 4 つの潮流には、共通する問題が 3 点ある。まず、分析対象年代が偏り、事件史的な記述に留まっているという点である。これは、国王が政治的権威を回復する契機となった事件や首相に焦点を絞った研究方法が主流となっているためだと考えられる。次に、国王の「政治的機能」への関心の偏重という問題がある。政府が国王をどのように利用しようとしたのか、そして国王はそれに如何に答えてきたのかという研究が多く、政治の場以外での国王の動向は明らかにされていない。そして最も重要なのが、国王の「政治的権威の回復」と「国民の支持獲得」が混同されているという問題である。既存の研究では、国王の政治的権威が高まれば、同時に国民の支持を獲得でき、またそれが国民統合に繋がるという暗黙の前提のもとで議論が展開し、国民の支

¹ 1992 年 5 月に発生した、民衆と軍部の衝突事件。前陸軍司令官スチンダー首相（在任期間 1992 年 04 月-1992 年 05 月）の退陣を求める大規模なデモ集会が開かれ、軍隊が発砲して多数の死傷者を出した。チャムロン元バンコク都知事によるハンストをきっかけに集結、これを抑圧しようとした政府が軍隊を投入したことによって発砲事件へと発展した（Baker and Phongpaichit 2005, 243-46）。国王が事態を収拾した事件として、また都市部中間層の台頭の現れとして有名な事件。

² The National Identity Office の略称。「タイらしさ」とは何かを規定するために設置された委員会で、有識者や政府の要人、官僚などで構成されている（Mulder 1997, 283）。

持を獲得するために、国王が国民に対してどのようなパフォーマンスを行ったのかという視点が欠けている。

そこで本稿では、分析対象時期を事件史的に区切ることを避け、国王が即位以来³継続して行ってきた地方行幸に焦点を当てる。国王自身が直接答えた数少ないインタビューの中で、プーミポン国王は「国民に身近な存在としての国王」という目標が、前国王アーナンタマヒドン王（ラーマ 8 世）から引き継いだものであるとして、国民に姿を見せるか否かが、歴代国王と自らの差異であると語っている（National Geographic Society 1982, 486-533）。このインタビューは、国王自身が意識して国民に「姿を見せて」いたということを示している。また、NIOや教育省が発行する多くの書籍の中でも、プーミポン国王の特徴として頻繁に地方行幸を行ってきた点が強調されている（cf. Mulder 1997, 290; NIO 2008, 69-73）。ここから、地方行幸は国民に姿を見せるために取り組まれた、プーミポン国王特有の行動であると考えられる。それにもかかわらず、既存の研究において行幸内容を詳細に分析したものはなく、行幸に関する記述は王室秘書局⁴が発表する公式記録を引き写したものに限られていた。本稿は、公務記録などの分析を通してプーミポン国王の行幸の実態を明らかにし、その中で「身近な国王」という新しい国王像の確立に向けてプーミポン国王がどのような行動をとってきたのかを分析する。

なお、本稿の分析には、主に王室秘書局が発行する『国王陛下の公務記録（พระราชกรณียกิจของพระบาทสมเด็จพระเจ้าอยู่หัว）』を使用した。さらにこれを補う形で、王室警護局長の伝記、NIO や新聞社が発行する書籍を使用している。本稿において単に「国王」と記述する場合、基本的には現国王プーミポンを指す。また、本来であれば「巡幸」と呼ぶべきところも、混乱を避けるため「行幸」という言葉に統一する。

1. 併存する 2 人の指導者

プーミポン国王自身が地方行幸を重要視していたとはいえ、即位後すぐ行幸に取り組むことができたわけではなかった。国王がタイに居住し、公務を本格的に執り行うようになったのは即位から 5 年半後の 1951 年末である。しかし、1932 年に立憲革命が発生して絶対王政が廃止されて以

³ 後述するように、「行幸」としての地方視察が開始されるのは、正確に言うと 1966 年である。

⁴ สำนักงานราชเลขาธิการ (Office of His Majesty's Principal Private Secretary)。王族の公務全般や財政を管理している。日本における宮内庁と同様の役割を果たしている。

降、国王の行動は、革命の中心的役割を果たした人民党⁵の政権のもとで制限される傾向にあった（Wilson 1962, 114; タック 1989, 371）。この時期、国王が担う多くの行事は廃止、または減少した。行幸に関して言えば、1955年に国王が東北地方へ初めて行幸をした⁶後、その人気に狼狽したピブーンは、地方旅行関連の予算を大幅に削減するなど徹底して国王の権威回復を阻止しようと試みている（Wilson 1962, 114）。その後、国王を制約するような環境は「すべて、1957年⁷にサリット⁸が起こしたクーデタによって一変」するものの（タック 1989, 176）、その時にも直ちに地方行幸が活発化したわけではない。本節では、プーミポン国王が地方行幸を活発化させる直前のサリット政権期に着目し、国王が当時担った役割について概観する。

クーデタによって政権を掌握したサリットは、陸軍中心の軍事独裁をおしすすめた。そのため、その軍事独裁を国内外に対して正当化する必要があった。その役割を担ったのが、プーミポン国王である。国王はサリットを共産主義に対抗する「首都の守護者」と呼び（Baker and Phongpaichit 2005, 177）、サリットのクーデタを容認、正当化した。これに対する見返りとしてサリットは、王室の威信を高めるために様々なことを行った。まずサリットは「タイ的原理⁹」を強調し、「国王とタイ民族は分離できない。建国以来、国王は民族の象徴であり、国民の尊敬の的である」（革命団布告¹⁰第4条）¹¹として、国王が国民／民族の象徴た

⁵ 1932年に絶対王政を廃止した、立憲革命を行った中心的組織。サリットが1957年にクーデタを起こすまで政権を握っていた。特に、1938～44年、1948～57年の2度にわたって政権を担ったブレック・ピブーンソクラームは、国名をシヤムからタイへ変更、国語をタイ語と定めるなど、強力な文化同化政策により、現在のタイの基礎を築いた。

⁶ 1955年に、国王が初めて行った行幸を指す。結婚してから初めての長期旅行だったこともあり、ハネムーンと呼ばれることもある。この年には東北部の全県への行幸が行われ、交通手段もヘリコプターや御料車以外に御召列車を使用するなど、それ以降の行幸とは規模、内容ともに一線を画している。その後、1957年の南部への旅行、1959年の北部への旅行が行われ、1950年代に行われたこの3つの旅行を合わせて三大行幸とされ（สำนักพระราชวัง 1989）、多くの関連書籍が出版されている。

⁷ 正確には、憲法と議会が完全に停止する1958年の2度目のクーデタ以降激変したと判断すべきだろう。

⁸ サリット・タナラット。1959-1963年に首相を務めた陸軍元帥。反共産主義を掲げることによってアメリカから大量の援助を受け、経済改革を行った。彼の首相就任期間が基礎となっており、以降タイは目覚ましい経済成長を見せた（末廣 2009; Connors 2003）。また、サリットは国会も憲法も停止するという軍部独裁体制を取ったにも関わらず、歴代首相の中で指折りの支持率を誇る（IDE 1995, 72）異例の首相でもある。

⁹ サガー・カーンチャナーカパンが1929年に出版した『ラック・タイ』という書籍に由来する。ラック・タイとは、「宗教・国王・国民／民族」というタイの三大要素を指す。この書籍は1928/29年の恩賜賞に応募し、王立学士院により銀賞に選ばれた。1975年の段階で第7版が発行されており、現在でも広く読まれている（赤木 1989, 89）。

¹⁰ 憲法と議会を停止したサリットが、法律の代わりに発布した布告（矢野 1975, 420）。

るべき存在だと定義した。1960年にNational Day¹²を立憲革命記念日である6月24日から国王の誕生日である12月5日に変更したことが、この考え方をよく反映していると言えるだろう。サリットにとって国王は、国家統治組織の頂点を構成するだけでなく、国民／民族を象徴する国家と不可分の存在であり、政府はそれを守るために存在していたに過ぎなかった（加藤 1995, 327; Baker and Phongpaichit 2005, 177）。この考え方に基づいて、サリットは国王を国民／民族の象徴として担ぎ上げるべく、次の2つのことを実施した。

ひとつは、王室・仏教伝統行事の復活である。サリットは、立憲革命以降中止されていた春耕式やカチン式¹³を復活させた。国王夫妻が春耕式で蒔いた種は国民にとって「ありがたい」種となり（タック 1989, 366）、カチン式での国王の行列は、1932年以前のような華やかな雰囲気で行われ、チャクリー朝¹⁴の連続性を想起させる契機となった（Wales 1995, 200-1）。こうした伝統的な儀式の復活を通し、全国民が共有可能な文化遺産を国民に見せ、国民のまとまりを強めることがサリットの目的であった（タック 1989, 365）。そして同時に、絶対王政期の儀式を復活させることによって、立憲革命以来名目上のものとなっていた「神聖で不可侵」¹⁵な国王らしさを、実際に国民に見せつけるという新しい効果もあったと考えられる。

もうひとつは、国王夫妻による外国訪問である。表1はプーミポン国王による外国訪問の履歴である。サリット内閣が正式に発足したのが1959年2月9日であり、同年12月から国王の外国訪問が始まっている。1960年は特に積極的に外国訪問を行っている。国王が前面に出ることで、サリットが独裁的であるという批判をかわし、さらには国王の行動へ国民の注意を向けようとしたのである（タック 1989, 355-58）。また、国王夫妻の外国訪問を受けて各国の王族がタイに答礼訪問するなど、タイ王室を「世界各国の王室」と結び付ける役割も果たした（*ibid.* 381）。国王夫妻の帰国後には最大規模の祝典が催され、サリットは、国王が諸外国

¹¹ 邦訳は矢野（1975）による。

¹² もともとチャクリー王朝創立の4月6日であったのを、ピブーン政権が立憲革命記念日である6月24日に変更、サリット政権期に12月5日に変更された。現在ではこの日を「父の日」と呼び、全国各地で国王の誕生日を祝う祝典が開かれる。

¹³ 僧侶に僧衣を献上する儀式。1970年代の行幸でも頻繁に行われる。

¹⁴ アユッタヤー滅亡（1767年）後、1782年に開かれた、バンコクを首都とするシャム王国の現在まで続く王朝（*เชษฐกัวงศ์* 2009, 18-44）。

¹⁵ 1932年12月憲法以降、「国王は神聖な地位にあり、何人も侵すことはできない（第三条）」と定義されてきた。なお、「何人も如何なる方法であれ国王を非難または起訴することはできない。」という新しい文言が加えられるのは、1968年憲法以降である。

表 1 国王による海外訪問一覧

年	訪問期間	訪問国
1959	12.18-12.21	ベトナム共和国
1960	02.08-02.16	インドネシア共和国
	03.02-03.05	ビルマ連邦
	06.14-07.15	アメリカ合衆国
	07.19-07.23	グレートブリテン および アイルランド連合王国
	07.25-08.02	ドイツ連邦共和国
	08.22-08.25	ポルトガル共和国
	08.29-08.31	スイス連邦
	09.06-09.09	デンマーク王国
	09.19-09.21	ノルウェー王国
	09.23-09.25	スウェーデン王国
	09.28-10.01	イタリア共和国
	10.01	パチカン市国
	10.04-10.07	ベルギー王国
	10.11-10.14	フランス共和国
	10.17-10.19	ルクセンブルク大公国
	10.24-10.27	オランダ王国
	11.03-11.08	スペイン王国
1962	03.11-03.22	パキスタン・ イスラム共和国
	06.20-06.27	マレーシア連邦
	08.18-08.26	ニュージーランド
	08.26-09.12	オーストラリア連邦
1963	05.27-06.05	日本
	06.05-06.08	中華人民共和国
1964	07.09-07.14	フィリピン共和国
	09.29-10.05	オーストリア共和国
1966	08.22-08.28	ドイツ連邦共和国
	09.29-10.02	オーストリア共和国
1967	04.23-04.30	イラン・イスラム 共和国
	06.06-06.20	アメリカ合衆国
	06.24-06.29	アメリカ合衆国
1994	06.21-06.24	カナダ連邦
	04.08-04.09	ラオス人民民主主義 共和国

1959 - 1967年までの訪問国総数

全 28 カ国 (*アフリカ、南アフリカ
への訪問は無し)

*สำนักงานสถิติแห่งชาติ・กรมศิลปากร 編 (2008) を参考に筆者作成

で歓迎されたことがあたかも国民全体の喜びであるかのような内容の演説を行った (NIO 2008, 431)。これによって、タイ王室が各国の王室と肩を並べる存在であり、同時に国民を代表する存在でもあるという印象を国民に与えたと考えられる。

伝統行事の復活や外国訪問によって国王が対外的に存在感を増していく一方、サリットは地方への訪問を積極的に行った¹⁶。この段階において、地方訪問という行為は国王のものではなく、首相の役割だったのである。サリットは、「国王がタイ民族の主権と栄光ある過去の体現者として存続し、その一方でサリットは現実の指導者・・・となるという形」(タック 1989, 230) を取ることによって、国王を頂点に据えながらも、自らの権威を確保し、政治的な指導者として君臨することを可能にした。サリットが政治的指導者として地方訪問を行ったのは、民族のま

¹⁶ 積極的に地方を訪問していたことについては、タック (1989) や Baker and Phongpaichit (2005) が言及しているが、具体的な回数等は明らかになっていない。ただし、サリット自身が地方を訪問して水や道路を始めとするインフラ整備の必要性を実感したと繰り返し述べていることから、「サリットが地方を訪問している」というイメージは、国民、少なくとも地方役人の間ではかなり定着していたと考えて良いだろう。

とまりや政治の安定を強化し、国民の必要としていることに対して、彼が大きな関心を抱いていることを国民に示すためであった (*ibid.* 246-9)。地方を訪問し、県や郡の官僚に直接指示を出すというサリットの行為は、首相の任務ではないとして反対されたことがあるとサリット自身が語っている (*ibid.* 277)。これは、サリット以前にはそのような首相がいなかったことを示している。地方を訪問し、住民の抱える問題を汲み取って国政に反映させるというサリットの指導者としてのパフォーマンスは、国民にある一定のインパクトを与えたと考えられる。

サリットはポー・クン¹⁷という実質的指導者として振る舞おうとした。これはスコータイ時代に理想の国王像とされたものであった。一方で国王は、荘厳な儀式を行う神聖な存在であり、国民からは遠い存在として映った。これは、王権を神格化するアユッタヤー的な国王像 (Jackson 2010, 35-7) だったと言える。これが、タックが言うところの「指導者の併存状況」(タック 1989, 16) である。

つまり、サリット政権下においてプーミポン国王は「国民に身近な国王」とはなり得なかった。国民と直接触れ合う役割は首相が担っており、国民が国王の姿を直接見る機会ほとんどなく、まして身近に接する機会などなかった。では、一体いつから国王は国民に「姿を見せ」はじめ、「国民に身近な国王」となったのだろうか。

2. 地方行幸の年次別傾向

国王が実際に国民訪問を始めるのは、1966年のことである。それまでは最も多くても年間 91 回、平均では 25 回前後だった「市民との謁見」回数が、この年を境に平均 150 回と増加する (タック 1989, 372)。公務記録は 1969 年 10 月以降のものしか刊行されておらず、それ以前の詳しいデータを手に入れることはできないため、「市民との謁見」の内容については不明である。とはいえ、先に触れたように、ピブーンが国内行幸に関する予算を大幅にカットしたことや、1967 年までは外国訪問を中心として活動していたことを鑑みれば、国民へ「姿を見せる」「新しい存在」として大々的に活動するようになるのは、1968 年以降のことであろう。タック (1989) が提示しているデータにおいても、「市民との謁見」が 190 回前後とさらに増加するのは 1970 年からとなっており (*ibid.* 372-

¹⁷ 「国の父」の意。父として、家族すなわち国民全員が幸福に暮らせるように尽力する指導者を指す (加藤 1995, 329-30)。父として国民の面倒を見るという温情主義的な面を持っていた (タック 1989, 219-58)。

3)、この解釈が正しいことを裏付けている。そこで本節では、国王による地方行幸への関心が増大してきた様子を、特に 1969 年 10 月以降に焦点をあてて論述する。

2.1. 国王の公務内容とその年次別傾向

王室秘書局は公務を 8 種類に分類しており、『国王陛下の公務記録』の巻末には、国王夫妻の 1 年間の公務回数一覧表が添付されている。国王関連の書籍が発行される場合などには、ここでのカウントが公式公務数として利用される。公務の分類は次の通りで、各公務の年次別の回数は [図 1] に記した。[図 1] 内の公務①～⑧という表記は、以下の分類に対応している。

公務①	王室・国家行事，宗教行事に関する公務 — 王室関連の行事や季節ごとの行事の他，寺院で竜頭を捧げる儀式，仏像を寄進する行事などを含む。
公務②	慈善活動 — 慈善事業として行われるスポーツの試合や映画，演劇などの観覧をその主催者として行うことなどを含む。
公務③	教育に関する行事／事業 — 学士以上の学位授与，専門学校以下の卒業証書の授与などを行うことを指す。
公務④	各地の人々の訪問，及び仏像* 1 の下賜 — 様々な地方，県の人々の訪問，及び学校や病院などの公的施設の開館行事への参加を目的として行われる。
公務⑤	国賓の迎賓 — 諸外国の王室関係者，及び外交団のもてなしを含む。
公務⑥	国内および国外の政府関係者との謁見
公務⑦	結婚式典* 2 への参加
公務⑧	他の王族への公務の委任

* 1 พระพุทธรูปราชูปถัมภ์

と呼ばれる仏像。プーミボン国王により，国の繁栄と団結を目指し，各県へと下賜された。普段は市役所などに保管されているが，定期的に知事や市長が祈りをささげるために公開する (Matichon online 2011 年 12 月 30 日掲載記事：

http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1325241428&grpid=02&catid=02)

* 2 サリット政権のもとで盛んに行われるようになった。タイ社会の新興エリートを正当化する意味を持った。国王が結婚式を執り行うことが，エリート身分の授与と見なされる。結婚式を執り行うことにより，国王が政治家，王族，官僚，実業家の一族の間の複雑な婚姻関係の強化を助ける役割を果たした (タック 1989, 367-68)

本稿では、公務④の「人民訪問」に着目する。公務①に該当する「宗教行事」や公務③の「学位／卒業証書の授与」などは、同じ場所で国王を奉迎する人々を訪問することが多いため、それらの公務と公務④の人民訪問は、重複して数えられている可能性がある。さらに、公務④

には、地方移動中に沿道に集まった人々と交流することも含まれていると考えられる。これが、公務④が膨大な数になっている原因だと考えられる。「国王の行幸は年に7-8ヶ月行われていた」(ชนิดา 2007, 133) という記述は、ここでカウントされる回数を参考にしたものだと考えられるが、これは誤りであると指摘できる。とは言っても、公務④の変遷を概観することが、行幸の大まかな年次別の傾向を把握するためには有意義であろう。

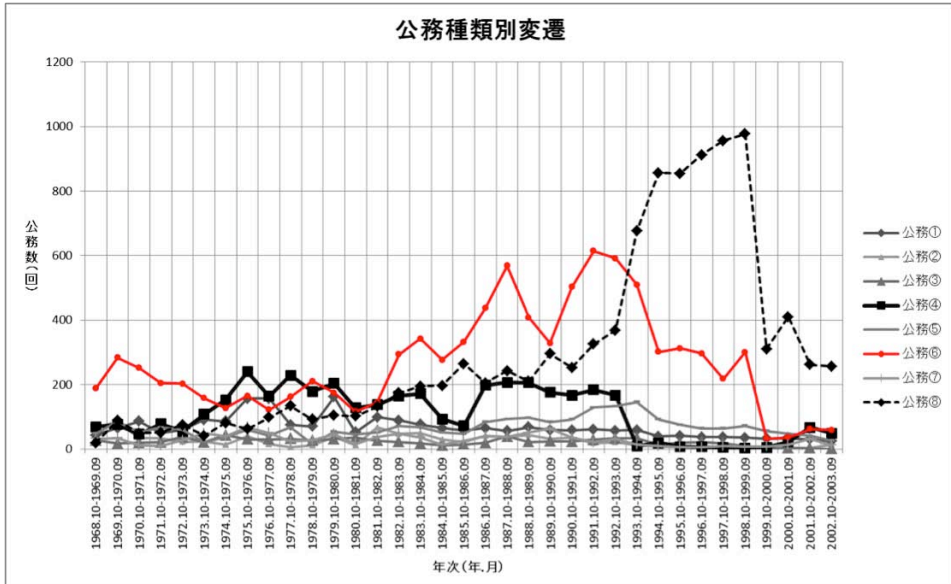


図1 公務種類別年次変遷

公務④の回数が増加し始めるのは1973年10月以降で、1970年代後半には公務の中でも最も積極的に行われる。その後多少の増減はあるものの、平均して年間200回前後続けられている。特に1970年代後半は、公務④が他の公務に比べて最も回数が多く、公務①も比較的頻繁に行われている。しかし、1980年代には公務⑥の増加にともない、公務①、④共に全体の中で占める割合が減少してくる。その後、1993年10月以降には公務④はほとんど行われなくなる。この時期を詳細に見てみると、実際に公務④が激減するのは1992年「五月の流血事件」以降である。同じ時期には公務⑥も減少し、公務⑧が増加している。そのためこの時期以降の公務記録には、「国王が●●(人名)に△△(場所)を訪問するよう委任した」という文章がたびたび見られるようになる。委任する相手は様々であるが、特に公務④を重点的に引き継いだのはシリントーン王女である。シリントーン王女の公務については、1991年9月以降発

行されている『シリントーン王女の公務記録¹⁸』に詳細が述べられている。

これら公務数全体の変遷をみていくと、国王が関心を持つ公務の推移がわかる。「1950年代から抱いていた王室の権威を回復するという目標に、1973年10月以降具体的に取り組むようになった」と指摘されることがある（Kershaw 2001, 136）。その時期には、公務④が増加する。そしてその後も、公務④が最も頻繁に行われている。これは、国王が王室の威信回復を目指し、公務④を重視してきたことを示唆している。また同時に、公務①も並行して増加し、式典を通して王室の権威を示す機会も増加している。つまり、国王は地方で国民に直接見せる「身近な国王」としての顔と、中央で儀式を通して見せる「威厳ある国王」としての顔、双方を使い分けることで、自らの威信回復を試みていると解釈できる。

1973年の10月14日政変をきっかけに公務④、つまり地方行幸は急増したが、1982年以降は公務⑥、すなわち政治的内容へと公務の比重は移っていく。このことから、行幸を開始する1966年から1970年代にかけて、国王は国民に姿を見せることで「身近な国王」として振舞おうと試みていることがわかる。

2.2 地方行幸の年次別変遷

では、具体的に国王はどのような目的を持ち、行幸してきたのだろうか。ここでは行幸を次のように分類し、各行幸数の変遷を追うことでそれを探ってみる [図2]。

- ①人民訪問：各地の人々を訪問し、声かけを行っているものを分類。北部では山地民への訪問を含む。
- ②寺院訪問：僧侶へのカチナ衣寄進など、主に仏教行事で寺院を訪問しているものを分類。南部への行幸では回教の寺院（モスク）への訪問も含む。
- ③開発関連の視察：地域開発のための視察など。
- ④軍・警察訪問：国境警備警察や軍、またはボーイスカウトへの訪問。
- ⑤卒業証書授与：国王が自ら卒業証書を授与するために、各地の大学や専門学校を訪問しているもの。

¹⁸ ร.ล. 1992. พระราชกรณียกิจสมเด็จพระเทพรัตนราชสุดาฯ สยามบรมราชกุมารี. Bangkok. 1991年10月から5年分の公務記録が刊行されている。

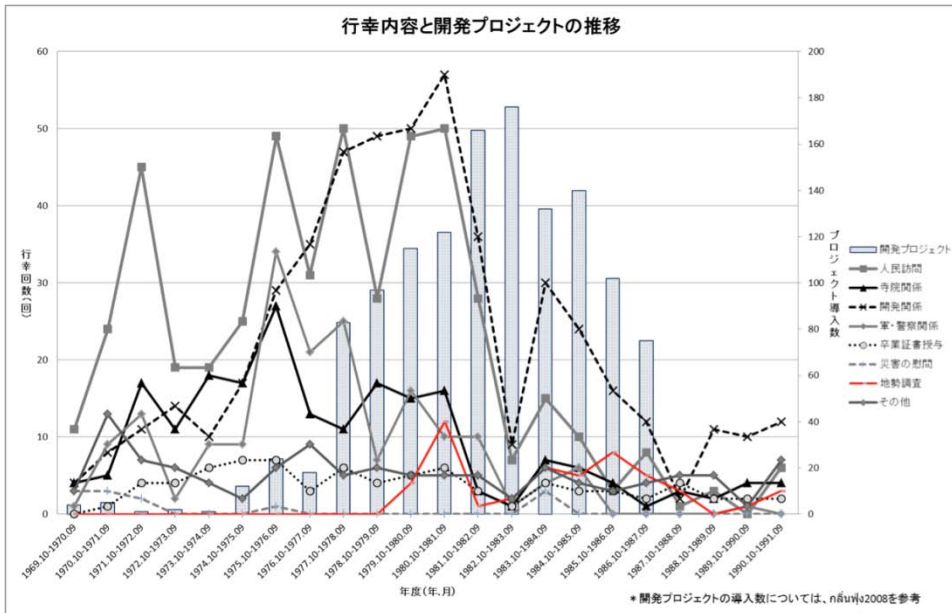


図2 行幸内容の年次別変遷

⑥災害の慰問：洪水や台風の被害の他、大規模火災などで被災した人々に対する慰問。ただし、人民を直接訪問せず救済物資を下賜しているだけの場合、ここに含まない。

⑦地勢調査：水利事業や農業事業の導入のため、周辺の地勢を調査することを指す。

⑧その他：歴代国王の銅像や記念塔の完成記念式典、国賓との会見¹⁹など、その数が少ないもの。

なお、ここで用いる実態に即した分類方法では、一度の行幸がその性質上複数の分類項目にまたがる場合、それぞれの項目に含めて算出している。

人民訪問

行幸の中で最も多く行われている。人民訪問は開発プロジェクト²⁰の導入が急増する1977年10月以前において最も高い割合を占め、その後も、

¹⁹ 皇室用語のひとつ。「会見」とは、外国の元首（国王や大統領）や王族（国王以外も）と会うことを指す。各国の首脳や国会議長、大使などの外国賓客に会うことは「引見」という（山本 2009, 140）。

回数自体はあまり変化しない。しかし、その内容は 1977 年 10 月以降、開発関係の人民訪問中心に変化する。一例をあげると、1971 年 11 月 18 日にプラーチンブリー県で行われた行幸において、8,000 人の人々を一堂に集めて人民訪問を行っている。しかし 1977 年 10 月以降は、プロジェクト導入予定地を視察し、そこに居住する数人への声かけに留まっている。1981 年 10 月以降には、少ない回数で推移している。

寺院訪問

訪問時期は入安居や安居明けの儀式がある 8 月や 11 月が多い。特に 11 月には僧衣献納祭へ参加するため、各地の寺院を訪問することが増える。

この行幸は 1975 年 10 月から 1976 年 9 月をピークに、1970 年代半ばに多く行われた。しかし、1981 年 10 月以降、人民訪問や開発関連の行幸同様減少し、その後はあまり行われなくなる。訪問先も特定の寺院に限られる。1970 年代は仏教行事で地方を訪れた際、寺院に多くの人々が集まり、そこで人民訪問も行われた。そのため、1976 年 10 月から 1977 年 9 月頃までは、人民訪問と並行するように回数が増えている。人々は寺院のある村だけでなく、近隣の村からも毎回 3,000 人以上が集まる。人々の動員方法については明らかではないが、チャニダーによれば、1960 年代に行幸が始まったばかりの頃には、人々が国王の奉迎に集まらなかったことから、1967 年頃までには人々を動員するための具体的な方法を記したマニュアルが発行されている (อินดา 2007, 135-37)。

開発関連の視察

開発関連の視察を目的とした行幸は 1974 年 10 月から増加し始め、1980 年 10 月から 1981 年 9 月の間にピークを迎え、その翌年から他の内容と同様に減少する。1983 年 10 月以降に再び増加するが、その内容は変化する。1982 年 10 月から 1983 年 9 月に激減する前には、プロジェクト実施（予定）地へ直接足を運んでいた。しかし、1983 年 10 月以降再び増

²⁰ ここで言う開発プロジェクトは必ずしも王室プロジェクトと同義ではないことに注意しなければならない。開発プロジェクトとは、地方開発のために各省庁が行うプロジェクトを含んでおり、その予算は国家予算から捻出されることもある。しかし王室プロジェクトとは、財源のすべてが王室予算、もしくは寄付から成り立っている (NIO 2008, 252-53)。また、王室プロジェクトに関わる職員のほとんどはボランティアであり (*ibid.* 253)、開発プロジェクトには公務員が関わっているという点も大きな違いである。本来であれば王室プロジェクトの導入年を記載すべきだが、王室プロジェクトの数え方が資料によって異なり、情報に偏りがあることから、目安として開発プロジェクトの導入年代を記載した。この年代は、(กลิ่นฟง 2008, 176-178) を参考にした。

加した際には国王考案開発研究センター²¹の視察が中心となっており、現地視察そのものが再び増加したわけではない。それに伴い、下賜するものにも変化が見られる。開発に関係する下賜物は、農産物、樹木、畜産物、プラーニン²²という国王が養殖している魚などの水産物など多岐にわたる。どれも、下賜後その場所で育てられることを目的として下賜されている。1982年10月以前は、農産物や畜産物の下賜が中心であったのに対し、それ以降は樹木の苗と水産物（魚の放流）が中心となっており、また、樹木などは人々に直接下賜されることはなく、開発関連施設や王室プロジェクト関連の森林、水産試験場などに一括して渡されるようになる。

軍・警察訪問

1975年10月から1976年9月に軍・警察の訪問を目的とした行幸の数が増加する。共産主義の勢力拡大の影響があったと考えられる。1975年にはベトナム、ラオス、カンボジアのインドシナ3国で共産党が相次いで内戦に勝利をおさめた。また、ラオスではナショナリズム運動が活発になり、反タイ運動も活発化していた（矢野 2008, 22-41）。一方タイ国内でも共産党の勢力が伸張していた。しかし、1981年10月から1982年9月以降、この項目の視察はほとんど行われなくなる。タイ共産党の勢力が著しく低下して壊滅状態に陥った結果、1981年に多くの国土防衛団（現地の人々で構成された志願者隊）が解散し、訪問対象そのものの数が減ったためと考えられる。

卒業証書授与

この項目は、他の要因に左右されることなく継続される。国王が卒業証書を授与する大学は、各地方1つか2つである。行幸全体の回数が減少

²¹ 持続可能な開発を目指して設立されたセンター。国王が初期に考案したセンターは6カ所で、1979年8月にチャチューンサオ県、1981年12月にチョンブリー県、1982年には1月にナラーティワート県、11月にサコンナコーン県、12月にチェンマイ県、1983年にはペッチャブリー県にそれぞれ「国王考案開発センター」が設立されている（NIO 2008, 352-3）。

²² ナイル・ティラピアのタイ名。プーミボン国王が命名した。もともとタイには生息しない魚であったが、1974年、魚類研究者である日本の今上天皇（当時は皇太子）が、栄養が豊富で美味だとされるこの魚を50匹、プーミボン国王に贈ったことからタイに入った。国王が王宮で養殖したものが全国の漁業センターに配られ、さらに養殖されて数を増やすという形態を取っている。繁殖が早いこと、環境適応力が高いこと、タイ人が好む雷魚と味が似ていることから、タイ国内において急速に普及した（*ibid.* 130-3）。現在では一般的に食される魚になっている。

しても、卒業証書授与式への参加は続けられている。この行為が学生の間で国王の支持を伸ばす要因となったとする見解もあるが (Handley 2006, 205-7)、数的な変遷からは特にその効果は明らかではない。

災害の慰問

大規模な災害は頻繁に発生するわけではないため、総数はあまり多くない。1969年10月から1972年9月の2年間、1975年10月から1976年9月、そして1983年10月から1984年9月に慰問が行われている。すべて洪水による被害の視察で、まずは上空から被害状況を視察し、その後避難所へ行って人々の慰問を行うという流れを取っている。1983年10月から行われている洪水の視察では、王妃を始めとする家族はすでに東北部へ移動していたが、国王のみバンコクに残って視察を続けている。この年の洪水では、9月～12月までの4か月間バンコクが浸水し、特に東部が大きな被害を受けた (Bangkok Post 電子版 2011年10月23日)。この時は上空からの視察や人々への慰問は行われなかったが、3日間連続で水門の開閉などに関する視察を行っている。

ただし、被災した土地への慰問が洪水に関するものに限られる点は、サリットが火災などの「お見舞い」を行っていたのに比べると、かなり少ない (Baker and Phongpaichit 2005, 168-171)。被災地への訪問は人々と直接触れ合う機会となることから、日本の天皇による行幸では重要視される傾向にある (山本 2009, 236-52; 原 2008, 165-8)。タイにおいても、国王は被災地の慰問を積極的に行ってきたとされている (NIO 2008, 267-73; Vasit 2006, 55)。例えば、1971年10月25日にはウボンラーチャターニー県の空港において、当時の県知事に対し白米、毛布、衣服、缶詰食品を下賜している。これは S 地区で発生した大規模火災によって焼き出された被災者への救援物資の例である。しかし、実際に被災地へ足を運んでいるのは洪水にかんするものに限られ、3度の災害に際してのみである。

地勢調査

これは、1979年10月の公務記録で初めて見られる言葉である。それ以前の土地調査は目的が明確であったのに対し、地勢調査という言葉で表される土地調査は、「国土の地勢調査」と書かれるのみで、目的も内容も明示されない。水利施設周辺や森林に関する地勢の調査が多いため、開発を目的とした活動と考えられる。

その他

銅像などのモニュメントの完成式典の他、白象献上の儀式などがある。村によっては水牛を見せたりすることもある。特に頻繁に行われるのは、写真の下賜で、合計 7 回行われている。1972 年 5 月 27 日にモンクット王（ラーマ 4 世）の絵が下賜されて以降、1975 年以降はチュラーロンコーン王（ラーマ 5 世）の絵や、自分の写真が下賜されるようになる²³。下賜される場所は、寺院、もしくはボーイスカウトの拠点となる場所であり、ボーイスカウトと国王との密接な関係²⁴が表れている。

開発プロジェクトとの関連

最後に、開発プロジェクトとの関連について簡単に触れておく。開発プロジェクトは 1977 年 10 月から増加し、1982 年 10 月から 1983 年 9 月の間にピークに達する。また、1976 年 10 月以降、明確に「王室プロジェクト関連の視察」という文言が現れるようになる。これは、1975 年に「国王考案プロジェクト特別委員会²⁵」が設立され、国王が考案したプロジェクトがまとめて管理されるようになったためだと考えられる。この時期を挟んで、行幸の目的に変化がみられる。人民訪問は 1976 年 10 月以前には寺院の訪問に付随して行われることが多く、開発事業との関係は希薄であった。しかし、人民訪問は 1976 年 10 月以降には開発関連

²³ 具体的には、以下の日程で下賜されている。

1976 年 7 月 19 日 アユッタヤー県の寺院にて、プーミポン国王自身の写真の下賜

1978 年 7 月 23 日 アーントーン県のボーイスカウトに、ラーマ 5 世と自身の写真の下賜

1979 年 4 月 5 日 ウタイターニー県のボーイスカウトに、自身の写真の下賜

1986 年 2 月 17 日 アーントーン県の寺院にて、自身の写真の下賜

1987 年 8 月 5 日 ナコーンナーヨック県の学校にて、ラーマ 5 世の写真の下賜

1988 年 8 月 18 日 チョンブリー県にて、ラーマ 5 世の銅像の完成式典及び写真の下賜

²⁴ タイにおけるボーイスカウト活動は、ラーマ 6 世によって導入された。1913 年には学校の教育活動として取り入れられたが、当時は親国王主義的で軍事訓練の性格が強かった。ピブーン政権下においては、ボーイスカウト活動の親国王主義的側面が排除されたが、サリット政権下で組織が現在の形に整えられると、再び親国王主義的組織となった。現在、タイボーイスカウトの盟主は国王であり、活動目的の中にも国王に忠誠を誓うという文言が盛り込まれている。また、活動を通して王族に対する礼の仕方や王族の活動について学ぶことが期待されている（村田 2007, 134-52）。

²⁵ OSCCRP=Office of the Special Committee to Coordinate Royal-initiated Projects 国王考案プロジェクト特別委員会事務局。国王が考案するプロジェクトは 1969 年以降、王室秘書局内にある国王の個人事業を管轄する部署が管理していた。しかし、1975 年にはクリット・プラモートが「国王陛下事業部」として再編、独立部署としてすべてのプロジェクトを管轄することになった。その後、プロジェクトの数が膨大になったことなどから、1981 年に OSCCRP が設立され、国家経済社会開発委員会の管轄下に置かれた（NIO2008, 191-92）。

の行幸に付随する形に変化する。さらに、開発関係の行幸とともに行われる人民訪問は、一ヶ所に大人数を集めてそこを訪問する形式ではなく、訪問先の幾人かに会うという形をとっている。これは、開発関係の行幸をする際に国王がその土地の人々と必ず話をする（NIO2008, 176）ため、人々への声かけのほとんどがこの形式になっていくことが理由である。公務記録においても、1976年10月以降の記録には人民訪問の際に集まった人数は記載されなくなる。

これらのデータから、国王が特に人民訪問を目的として行幸を行ってきたことがわかる。また、1970年代前半には人民訪問は寺院の訪問と組み合わせる形で実施されてきた。しかし、1975年に王室プロジェクトが正式に導入されると、人民訪問は開発関連の視察と共に行われるという変化が見られる。これは次のように解釈できるだろう。1970年代前半には仏教行事や伝統行事を通じて「威厳ある国王」という側面と、国民に親しく接する「身近な国王」という側面の2つの面を使い分けることを目指した。その後1975年10月以降になると、「威厳ある国王」という側面よりも、開発事業を指導する「国民に奉仕する国王」という面がより強く打ち出されるようになってくる。それは、「身近な国王」という面と密接に結びついていた。この「身近な国王」という面は、1982年に行幸そのものの回数が減少するまで、人民訪問という方法を使って強調され続けてきた。

そうとはいえ、人民訪問だけで国王が身近な存在になったとは考えにくい。国王は、サリット政権期に高められた威信によって、国民から遠い存在になっていたからである。そのような国王が、如何にして「身近な国王」となっていたのか。次節では、国王が「身近な国王」として自らを如何に演出してきたのかを、人民訪問の内容や方法から分析する。

3. 「身近な国王」としてのパフォーマンス

プーミポン国王は、サリット政権期に荘厳な儀式を執り行う神聖な国王という存在に押し上げられただけでなく、国王に対して使用する王室語²⁶と市井の人々が使用する言葉とは大きな乖離があり、国民が国王を「身近な国王」として認識するには、大きな壁が存在していた。では、国王はこの問題をどのように克服していったのだろうか。

²⁶ 王族自身が使用する言葉ではなく、「国王または王族に対して話しかける際に用いる言葉」を意味する。通常は、この言葉を用いない限り、王族と対話することは許されなかった（石井2002, 306）。

3.1 移動中のパフォーマンス

移動手段		合計	1969-1974年	1975-1980年	1981-1986年	1987-1991年
御料車	利用回数(回)	9,404.0	1,125	2,207	1,376	4,702
	利用距離(km)	326,511.5	35,533.2	77,343.0	50,379.6	163,255.7
御召列車	利用回数(回)	16	8	---	---	8
	利用距離(km)	7,986.2	3,993.1	---	---	3,993.1
王室専用 飛行機	利用回数(回)	1,004	127	231	144	502
	利用距離(km)	350,448.0	48,335.0	71,917.8	54,971.2	175,224.0
王室専用 ヘリコプター	利用回数(回)	1,898	281	419	246	949
	利用距離(km)	130,133.2	22,145.6	28,885.2	9,035.8	70,066.6
御召船	利用回数(回)	108	18	30	6	54
	利用距離(km)	1,553.2	171.1	531.0	74.6	776.6
ボート	利用回数(回)	24	12	---	---	12
	利用距離(km)	1,332.0	666.0	---	---	666.0

移動手段は、ほとんどがヘリコプターか御料車となっている [表 2]。1950年代に行われた三大行幸では積極的に公共交通機関を使用する傾向にあったが (สำนักพระราชวัง 1989)、1969年10月以降の行幸では御料車、もしくは王室専用ヘリコプターを使用する頻度が高い。ただし、南部では数回御召列車が使用されたことがある。なお、公式発表においては御召船やボートなども含まれているが、これらは行幸よりも儀礼としての面が大きい。

王室専用飛行機やヘリコプターの操縦は空軍が担当しているが (Vasit 2006, 9)、御料車の運転は国王自身がすることも多かった (*ibid.* 19)。航空機やヘリコプターでの移動の場合、目的地の空港では公務員や軍人などが国王を奉迎するのみで、一般の人々が国王を「見る」ことはない。しかし車での行幸の場合、多くの人々が国王を一目見ようと沿道に集まった。人々は果物や野菜などの贈り物を献上しようと持参し、国王や王妃は、護衛が手伝う形でそれらを直接受け取った。さらに、国王自身そのような機会をできる限りつくろうと試みている (*ibid.* 7)。沿道のどの辺りに何名程度の国民が待っているのかを、前駆車に乗車する王室警護局長が逐一国王の無線へ知らせ、国王夫妻は多くの人々が待つ場所でスピードを落としたり下車したりした (*ibid.* 7)。御料車で移動は、少なくとも1970年代には国王と人々が触れ合う機会としてかなり

機能した。時には車が立ち往生するほどの人々が車に群がった²⁷ということから (*ibid.* 48-50)、車自体かなり低速走行だったと考えられる。車での移動は、国王にとっても自らを国民に「身近な国王」として演出するための重要な手段であった。

3.2 会話による「対等な」関係の演出

国王を奉迎した人々に対して、「その暮らしぶりに不自由がないかどうか聞いて回った」と公務記録に記述されている。実際に声をかけられた幾人かの人々によると、国王がかけた言葉は「仕事は何か」「今の仕事は疲れないか」「年齢はいくつか」といったものから、仕事のアドバイスまで、様々である (Khaosot ed. 2003, 51-120)。

また、国王と会話をする時には、王室語を使用しなければならない。しかし、国王はその言葉を使うことを人々には強要しなかったようである。

— お父様 (国王一筆者注) は言いました。国王は仏ではないから、王室語を使わずに方言で話してもいいですよ、と。 (*ibid.* 73)

これは 1969 年 6 月 29 日の発言である。その後の行幸においても同様のスタンスが取られたであろうと考えられる。この王室語を正確に使用できる者は現在のタイでもごく少数である。普段使用する機会が無い上に、クメール語由来の単語が多く、通常のタイ語とは大きく異なっているからである。実際、「県知事の中には、王室語を正しく使用できないものが多く見られた」 (Vasit 2006, 78) というから、地方の農民たちが正確に王室語を使用することができたとは考えにくい。

民衆にとって、自分たちと同じ言葉づかいで話す国王は、より身近な存在として、そして慈悲深い存在として映ったであろうと考えられる²⁸。国王は、王室語を強要しないことを通しても、「身近な国王」として自らを演出することに成功していると言える。

²⁷ 1970 年 6 月 20 日、ナコーンサワン県にて病院の視察へ向かう途中で起こった。この日のことを、ワシットは「護衛にとって、最もひどい悪夢が現実のものとなった」 (Vasit 2006, 50) と記している。このあと、国王夫妻は自ら車を降り、徒歩で目的地の病院まで向かった (*ibid.* 50-1)。

²⁸ とはいえ、王妃に話しかけられた男性が「緊張して何も答えることができなかった」 (Khaosot ed. 2003, 92) というように、話かけられても反応できる人々ばかりではなかった。

3.3 空間共有の効果

平均的な活動時間は「11 時～14 時の間に出発、18 時～19 時前後帰宅」というものである。国王のための昼食会場確保という課題があるため、午後に出発するという形がとられていると考えられる。しかし、遠方の県に出かける際には午前中から移動を開始することもあり、昼食を行幸先で取る場合、王族が使用する施設の近隣であればそこで、無ければ軍関係の施設での昼食となる。食事会以外、夕食を離宮や宮殿の外で取ることはない。

一度の行幸で少なくとも 3 か所以上の村を訪問するのが一般的な行幸スタイルで、一ヶ所に留まっている時間は短い。例として、1971 年 11 月 27 日にウボンラーチャターニーでシリントーンダム完成記念式典に出席した際の日程をみると、ダムでの記念式典には 3 時間、地方自治体への行幸、病院や学校の視察はそれぞれ 30 分程度、最後の人民訪問は 20 分程度である。つまり、訪問場所は多くとも、各場所で費やす時間が正味 15 分程度という少ない時間のみの訪問だったと考えられる。それでも民衆側には、国王が 1 分間でも立ち止まれば、それを「長い」と感じた者もいた (Khaosot ed. 2006, 83)。ただし、人民訪問では毎回 3,000 人から 5,000 人ほどが集まると記録されており、全員が国王を実際に見ることができたかどうかは疑わしい。それでも、国王を迎えるという「空間」の共有には一定の意義が見出せる。国王を迎える際、タイの国旗に「**ทรงพระเจริญ** (国王陛下万歳)」と書かれた小旗²⁹を振る。日本では、同様の小旗を振り上げたり、君が代を斉唱したりすることなどの行為を行うことで、皇太子や天皇と人々との一体感を演出したとされる (原 2011, 284)。タイの場合、この慣行が始まった時期や場所は不明だが、1950 年代の三大行幸の写真には旗は見られないこと、そして 1969 年 10 月からの公務記録にはすでにみられることをから、1960 年代に始まる慣行であったと推測される。実際、1964 年頃に国王奉迎のためのマニュアルが作成されている (ชนิดา 2007, 135)。国王を称える小旗を持ち、共に振ることが、国王を奉迎したという実感に繋がった。例え国王の姿を見るのは一瞬であっても、または見るができなくとも、旗を振ったり、熱狂する人々の中に混ざったりすることによって「空間」を共有し、国王との一体感を持つようになっていったのではないか。

²⁹ 日本においても同様の行為が見られる。日本ではこの小旗を配布しているのは民間団体であるとされるが、具体的な団体名等は不明である (山本 2009, 206)。

3.4 誇張された宣伝

王室秘書局の公式発表によれば、国王は積極的に公務④を執り行い、各地を訪問していることになっている。だがしかし、実際の活動日数を見てみると、必ずしも公式発表と合致するとは言えない。「行幸」と書かれている公務を抽出、活動「日数」を算出し直し、公式発表と実態とを比較した〔図3〕。ここから、王室秘書局の公式発表と実際の活動日数との間に誤

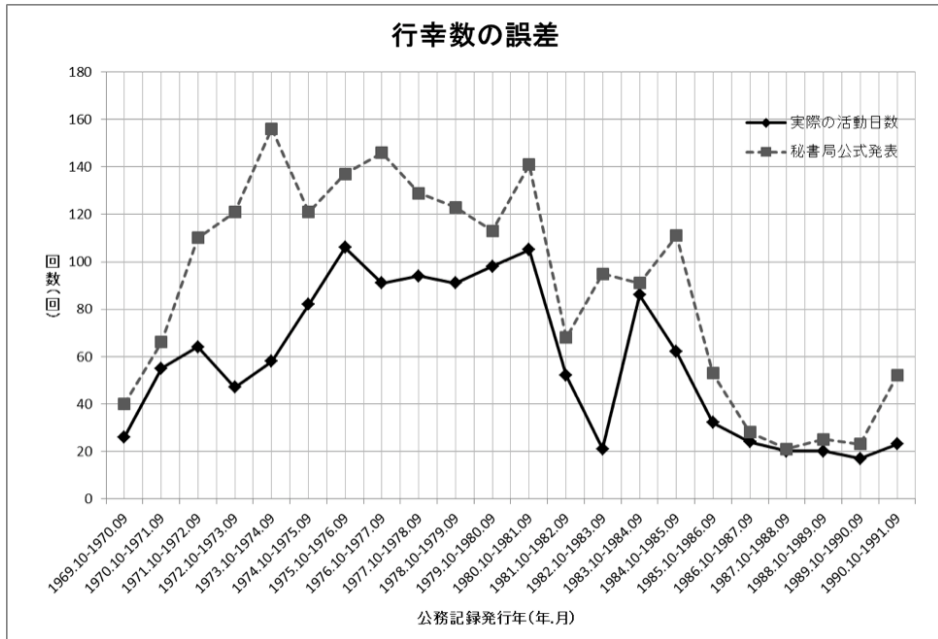


図3 行幸数の誤差

差があることが明らかになった。図中の「秘書局公式発表」は、秘書局が国王の行幸日程として発表している日数を指している。「実際の活動日数」は、「秘書局公式発表」から、移動日、王妃のみの地方訪問日、プライベートな地方訪問日の3種類の日程を差し引いたものである。移動日とは、公務が無く、地方の離宮へ移動しただけの日を指す。また、国王と王妃が同じ日に別の場所を訪問している場合、王室秘書局はそれらを別々に数えているが、本稿では王妃のみの地方訪問は取り扱わず、活動日数から除いた。その他プライベートな地方訪問とは、主にグライガンウォン離宮のビーチに行くことや、南部への家族旅行などを指している。公務記録中の注釈において「*プライベート (การส่วนพระองค์)」と記入しているものを活動日から差し引いた。

まず、公式発表と実際の活動日数には、大きな開きがあることが見て取れる。1973年10月から1974年9月の差が最も大きく、公式発表の方が98日も多い。加えて、行幸の回数が増加してくる時期にも違いがみられる。公式発表では1971年10月以降に行幸回数が増加しているが、実際は1973年10月以降数値が伸びている。回数の減少時期は1984年10月から1985年9月以降でほぼ一致するが、実際の活動日数では1982年10月～1983年9月に一度激減している。また、図1と比較してみても、公務④と行幸の減少時期が全く異なっていることがわかる。1986年9月以降、公務④は再び急増するが、実際に行幸は全く増加していない。最も重要なのは、国王の行幸が最も盛んだった1970年代に公式発表と実質的な日数との間に大きな乖離が見られるという点である。行幸の回数自体が減少する1982年10月以降では、公式発表と実態との間にさほど乖離がないことから、行幸日数の数え方が誤っているとは考えにくい。つまり、地方を頻繁に行幸する「国民に身近な存在」としての国王像は、ある程度実態を誇張した形で広められているといえそうである。

実際に行幸回数が増加してくる1973年10月は、10月14日政変が発生しており、この年は国王の威信が高まり、タイ政治の転換期となった（Handley 2006, 214-6）。当該年度は政治の転換期であっただけでなく、行幸にとっても転換期となっているのである。つまり、1973年10月以降は国王が自らの裁量で行幸の日程を決めることが可能になったのではなかろうか。図中には示していないが、プライベートでグライガンウォン離宮に滞在する日数が増加していることが、それを裏付けているように思われる。ここで興味深いのは、行幸回数が増加する時期が新聞の発刊数が急増する時期と重なるという点である。タイにおいて、新聞発刊の許可が下りる時期は1970年代、特に1974年に集中している（Baker and Phongpaichit 2005, 221）。新聞の種類が急増する時期と国王の行幸回数が増加する時期の関係性は明確ではない。しかし、タイで誕生したばかりの新聞社がこぞって国王の行幸を取り上げたたであろうことは想像に難しくなく、国王の地方行幸を多くの人々へ宣伝する役割を担ったと考えられる。

では逆に、1982年10月から1983年9月の間に行幸日数が激減した原因は何か。この年に国王の行幸が激減した原因は、国王が心臓の手術のために渡米していたためである。この年に国王が実際に行った行幸は26日のみで、他はすべて王妃によって代行されている。しかし、王妃が積極的に単独で行啓を行ったのは、この年だけ³⁰である [図4]。

³⁰ この年は行幸を取りやめることができなかつたのは、急な日程変更が不可能であったか、もしくはこの年の行幸が重要な意味を持っていたためだろう。1982年はチャクリー

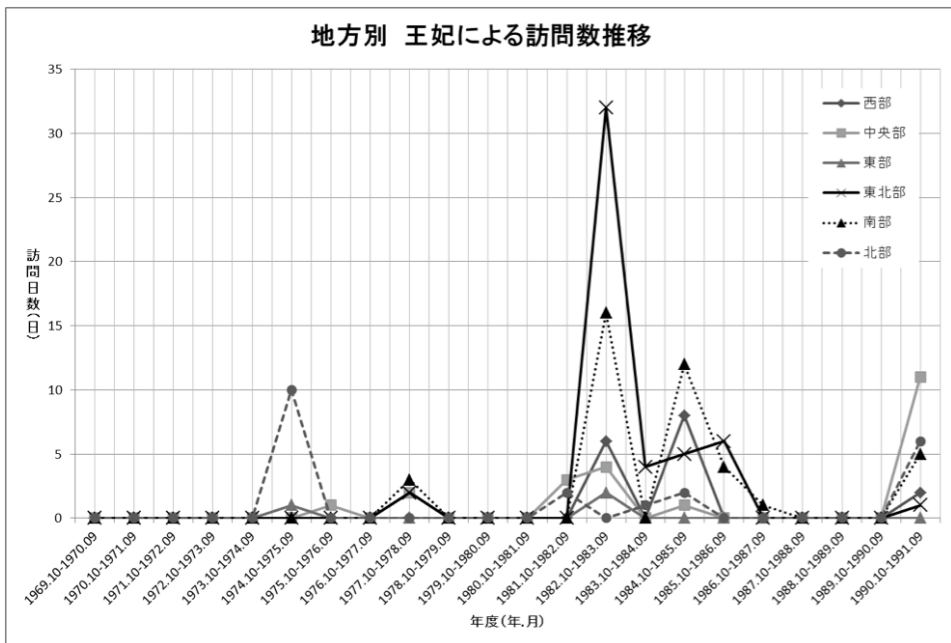


図4 王妃単独による訪問数の推移

国王は、行幸を御料車で行うことによって、できる限り多くの国民と触れ合うことを目指した。さらに、王室語を使わない自然な言葉づかいを人々に許可することで、人々の中にある国王への心理的な壁を取り除こうとした。これらの行動は、人々の中に「身近な国王」像を作り上げる効果があったと考えられる。また、国王と直接触れ合えない人も、小旗などを使用することで、国王と空間を共にしているという高揚感を抱いたと思われる。加えて、王室秘書局や新聞などのマス・メディアが、多少誇張した行幸の回数・様子を宣伝したため、行幸の場に居合わせなかった人々の中にも国王を身近に感じたものがいたと想像される。こうした工夫や努力については、インタビュー集などを見る限り、国王を身近に感じさせる上で一定の効果があったであろうことは明らかである。特に宣伝については、「身近な国王」という国王像を広める効果だけでなく、「日常生活において国民を『臣民帰り（原文まま）』させる装置」（林 1991, 162）としての効果もあったことが指摘されていることから、国王を取り巻くメディアの役割については、さらなる考察が必要であろう。

朝創立 200 周年記念の年であり、王室にとっては重要な年であった。そこで、王妃が代理を務めることでこの記念の年を乗り切ったと考えられる。

おわりに

プーミポン国王自身が自らと歴代国王との差異として意識し続けてきた、「身近な国王」という国王像は、地方行幸に負うところが大きい。ただし、即位当初からそれが実現したわけではなかった。サリット政権下では、国内を視察し、問題を解決するのは首相の役割だったからである。この段階で国王はあくまでも国外向けの「国の顔」、そして伝統行事を行う「威厳ある国王」に過ぎず、国民にとって「身近な」存在ではなかった。しかし、サリットの死後ほどなくして開始された地方行幸を上手く利用することにより、「身近な国王」という国王像を定着させていった。

地方行幸が本格化するのは、1973年10月以降のことである。一方では、サリット政権期に確立された「威厳ある国王」像を、伝統行事を通じて維持した。他方では、国王は行幸、特に人民訪問に重点を置き、国民と親しく触れ合うことによって「身近な国王」像の確立に努めた。各地の寺院や中央で行われる王室行事において、荘厳な儀式を執り行う「威厳ある」国王が、大衆の面前では（行列を成していたとしても）各地を自らの運転する車で訪問し、くだけた口調で語りかける「身近な」国王に変化するという二面性を、国王は巧みに利用していったのである。

最終的には、サリット政権期に作られた、威厳ある神聖な国王というアユッタヤ的国王像と、行幸を通じて定着していった国民に身近で実質的指導者ポー・クンというスコータイ的国王像とが、プーミポン国王一人に集約されたことの意義は大きいだろう。

さらに、本稿では紙面の関係上詳細に論述することはしなかったが、70年代後半からは、開発事業の地方への導入を積極的に行い、「国民に奉仕する国王」という、新しい国王像を生み出した。そしてこの行動により、かつて地方訪問を積極的に行い、視察内容を国家開発に反映させてきたサリットと国王との間に、さらに多くの類似点が生まれることになったと推測される。

以上のように、プーミポン国王は既存の国王像と行幸を通して生み出される新たな国王像を巧みに使い分け、国民から絶大な支持を得るようになった。そうした支持を背景として、国王は権威を強化した。ただそれは同時に、サリットのように地方を積極的に訪問し、国民の声を直接吸い上げることができる首相が登場すれば、支持が相対化されて、国王の立場が揺らぐ可能性があるということを示している。タイの王室は、血筋や憲法が権威を支えているのではなく、国王自らが国民の支持を獲得するために積極的に動いていかななくては安定が難しいのである。その意味において、プーミポン国王が他の追随を許さない「強い国王」になったことは確かである。

参考文献

一次資料

- ร.ล. (สำนักพระราชเลขาธิการ/Office of His Majesty's Principal Private Secretary) (1970-2003). พระราชกรณียกิจของพระบาทสมเด็จพระเจ้าอยู่หัว (『国王陛下によるご公務』). Bangkok.
- ร.ล. (สำนักพระราชเลขาธิการ/Office of His Majesty's Principal Private Secretary) (1992b). ประพระราชกรณียกิจสมเด็จพระเทพรัตนราชสุดาฯสยามบรมราชกุมารี (『プラテーブ殿下によるご公務』). Bangkok.

日本語文献

- IDE (アジア経済研究所). 1995. 『発展途上国環境問題総合研究報告書 -中国・タイ環境意識調査の集計表-』 アジア経済研究所.
- 赤木攻. 1989. 『タイの政治文化—剛と柔—』 勁草書房.
- 石井米雄. 2002. 「タイ国王をめぐる言説」 岩波講座『王権と儀礼 天皇と王権を考える5』 岩波書店: 297-318.
- NIO (The National Identity Office) (編). 2008. 『大地のカパーミポン国王』 アマリン・プリンティング・アンド・パブリッシング・パブリック・カンパニー, バンコク.
- 加藤和英. 1995. 『タイ現代政治史 -国王を元首とする民主主義-』 弘文堂.
- 末廣昭. 2009. 『タイ 中進国の模索』 岩波書店.
- タック、チャルムティアロン. 1989. 『タイ -独裁的温情主義の政治-』 玉田芳史訳, 勁草書房.
- 日本タイ協会 (編). 2008. 『現代タイ動向2006-2008』 めこん.
- 野津隆志. 2005. 『国民の形成 -タイ東北小学校における国民文化形成のエスノグラフィ-』 明石書店.
- 林行夫. 1991. 「「王」・功德・開発 -現代タイ王権と仏教-」 松原正毅編『王権の位相』 弘文堂.
- 原武史. 2008. 『昭和天皇』 岩波書店.
- 村田翼夫. 2007. 『タイにおける教育発展 -国民統合・文化・教育協力-』 東信堂.
- 矢野暢. 1975. 「タイにおける「革命団布告」の政治機能 -73年「10月政変」の背景についての一考察-」 『東南アジア研究』 12(4): 419-35.
- 山本雅人. 2009. 『天皇陛下の全仕事』 講談社.

英語文献

- Baker, Chris, and Phongpaichit, Pasuk. 2005. *A history of Thailand*. New York: Cambridge University Press.
- Bowie, K. 1997. *Rituals of national identity*. New York: Columbia University.
- Connors, Michael K. 2003. *Democracy and national identity in Thailand*. London: Routledge Curzon.
- Hamilton, Annette. 2002. Rumours, foul calumnies and the safety of the state: Mass media and national identity in Thailand. In *National identity and its defenders: Thailand today*, edited by Craig J. Reynolds, 277-307. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Handley, Paul M. 2006. *The king never smiles: A biography of Thailand's Bhumibol Adulyadej*. New Haven and London: Yale University Press.
- Jackson, Peter A. 2010. Virtual divinity: A 21st century discourse of Thai royal influence. In *Saying the unsayable: Monarchy and democracy in Thailand*, edited by Søren Ivarsson and Lotte Isager, 29-60. Copenhagen: NIAS Press.
- Kershaw, Roger. 2001. *Monarchy in South-East Asia*. London: Routledge.
- Kobkua, Suwannathat-Pian. 2002. The monarchy and constitutional change since 1972. In *Reforming Thai politics*, edited by Duncan McCargo, 57-71. Copenhagen: NIAS Press.
- . 2003. *Kings, country and constitutions: Thailand's political development 1932–2000*. London: Routledge.
- McCargo, Duncan. 2005. Network monarchy and legitimacy crisis in Thailand. In *The Pacific Review* 18(4): 499-519.
- Mulder, Niels. 1997. *Thai images: The culture of the public world*. Chiang Mai: Silkworm books.
- National Geographic Society. 1982. Thailand's working monarch. In *National Geographic Magazine* October 1982. 486-98. Washington D.C.
- Vasit, Dejkunjorn. 2006. *In His Majesty's footsteps : A personal memoir*. Bangkok: Heaven Lake Press.
- Wales, Quaritch. H.G. 1995. *Siamese state ceremonies: With supplementary notes*. London: Routledge.
- Wilson, David A. 1969. *Politics in Thailand*. New York: Cornell University Press.

タイ語文献

ปรากฏการ กลิ่นฟุ้ง. 2551 (2008).

“การเสด็จพระราชดำเนินท้องที่ต่างจังหวัดของพระบาทสมเด็จพระเจ้าอยู่หัวภูมิพลอดุลยเดช พ.ศ.๒๔๙๓-๒๕๓๐” (『プーミボン・アドウンヤデート国王陛下による各県への行幸 仏暦2493-2530年』) M.A. thesis. Chulalongkorn University.

Khaosot (ข้าวสด). ed. (2006). ตามหาคนในรูป ภาพมงคลในหลวงกับประชาชน.

(『写真の人物を訪ねて：国民と共にある国王の吉祥のお写真』). Bangkok: มติชน.

ชนินดา ชิตบัณฑิตย์. 2550 (2007). โครงการอันเนื่องมาจากพระราชดำริ:

การสถาปนาพระราชอำนาจในพระบาทสมเด็จพระเจ้าอยู่หัว (『王室プロジェクト: ปูมิบอน国王による王室の権威生成』). Bangkok: The Foundation for The Promotion of Social Science and Humanities Textbooks Project.

เพ็ชรี กิตติวิทยากุล. 2532 (1989).

“การเข้าถึงพระบรมราโชวาทและพระราชดำรัสพระบาทสมเด็จพระเจ้าอยู่หัวภูมิพลอดุลยเดช” (『プーミボン・アドウンヤデート国王陛下による誕生日演説によるお言葉』). M.A. thesis, Chulalongkorn University.

อุดม เขยกิจวงศ์. 2552 (2009). พระมหากษัตริย์แห่งราชวงศ์จักรี ๑-๑๙. (『ラーマ1世-9世までの歴代国王』). Bangkok: บริษัทสำนักพิมพ์แสงดาว.

สำนักพระราชวัง จัดพิมพ์ เนื่องในวันเฉลิมพระชนมพรรษา. 2532 (1989). เสด็จ

เยี่ยมราษฎร ภาพ ส่วนภาพยนตร์ส่วนพระองค์. (『国王陛下のご旅行における人民訪問の御真影』). Bangkok: สำนักพระราชวัง.

■ウェブサイト

Matichon Online URL : <http://www.matichon.co.th/> (最終閲覧 : 2011.01.15)

Chie Sakurada is a PhD Candidate in the Graduate School of Asia and African Area Studies (ASAFAS), Kyoto University. She obtained a Master of Arts degree in area studies from Sophia University with a thesis entitled A Reappraisal of the image of his majesty King Bhumibol: An Analysis of his provincial visits in 2011. Her research interests include the modern history of Thailand and her current research focuses on the influence of royal visits by King Bhumibol on the formation of the national identity of Thailand.